

# 第7回国際サンゴ礁 シンポジウム見聞録

林原 毅

阿嘉島臨海研究所



Report on the 7th International Coral Reef Symposium T. Hayashibara

国際サンゴ礁シンポジウムは4年に一度開催される、サンゴ礁研究者のオリンピック(?)のようなものです。私と下池研究員は、グアムで昨年6月に開催された第7回のシンポジウムに保坂理事長、大森教授とともに参加する機会をいただきましたので、簡単にご報告いたします。

学会は、基調講演とパネルディスカッションに続いて、約400の一般講演が、地球規模の環境変動とサンゴ礁への影響、サンゴ礁のモニタリングの方法、サンゴ礁の代謝、サンゴの生殖と加入、サンゴ礁資源の管理など32のカテゴリーに分類され、5つの海上に分かれておこなわれました。参加者は500名に達し、日本からも50名が参加してアメリカ、オーストラリアに次ぐ多さでした。

今回の学会では下池研究員が「ミドリイシサンゴの群体内部分産卵」について発表しました。

私達の発表の後、大森教授がAMSLの紹介をし、阿嘉島で撮影されたサンゴの産卵のビデオを上映しました。美しい慶良間の海とサンゴ礁研究の新たな拠点としてのAMSLに関心が高まったようで、翌日AMSLのパンフレットを受付に置かせてもらいましたが、すぐになくなってしまいました。一番嬉しかったのは、帰国後にカルフォルニア大学のMorse教授夫妻が、8月にぜひ訪問したいと手紙をくれたことです。結局、台風のために阿嘉島へは来られませんでした。Morse教授はサンゴ幼生の着生促進など、ケミカルエコロジーに関する多数の論文を送ってくれました。

私達が聴講した発表で興味深かったものとしては、オーストラリアのWillisらやグアム大学のRichmondが、一斉産卵では相当な割合で種間交雑が

起こっており、それが着生・加入している可能性を示したことで、サンゴの種の概念にも再検討をせまるものとして意義深い研究だと思いました。私達も阿嘉島周辺でミドリイシ類の種類の多さと同定の困難さを日頃から感じており、その理由の一端がわかったような気がしました。この他に、Morseらのサンゴ幼生の加入実験、Wallaceらのミドリイシ類の生物地理やVeronの日本の造礁サンゴの分布などが興味深く、サンゴ礁のモニタリングに関する数多くの発表は今後の私達の調査に参考になると思いました。

学会の雰囲気はとても和やかで、あちこちでコーヒーを片手に談笑する姿がみられました。地元企業の後援により毎日ビュッフェスタイルの昼食が提供され、ホテルや空港への送り迎えなどのサービスも行き届いており、これが国際学会かと改めて感心しました。

学会の合間にはグアム大学の臨海実験所を見学したり、タモン湾周辺でサンゴ礁の観察をしたりしました。グアムのサンゴ礁は阿嘉島に較べ貧相でオニヒトデがだいぶ目につきました。タモン湾の周りは大きなホテルに囲まれ、建設中のものも多く、地元の自然保護グループはそれらの影響だと主張しています。ホテルの多くは日本の資本によるものらしく、肩身が狭い思いがしました。

今回の学会では、様々な国の研究者と知り合うことができとても有益でした。今後もこれらの人たちと情報交換をしながら研究を進めて行きたいと思えます。最後に、学会参加の機会を与えて下さった保坂理事長、大森教授、私達のつたない英語を指導、矯正してくれたクリス・ノーマンさんに深く感謝いたします。